

### 前書き

ここではアイスキュロスの悲劇『オレスティア』における「正義」dike の思想について考察する。「正義」はアイスキュロスの『オレスティア』における中心思想である。しかしこれは「正義は必ず不義に勝つ」というような単純な思想ではない。むしろその「正義は我にあり」というような一方的な論理の主張には限りない応報の悪循環に陥る危険があり、この独善的な正義の主張が氏族制度の倫理と絡み合って血の報復の応酬に終始するときには深刻な問題を生ずる。氏族倫理が強固に支配している部族社会から都市国家へと古代社会が移行する時期に、人々が直面した困難な現実としてこの「正義の倫理」の問題があった。古い因習の掟から脱却して市民社会を支える新たな倫理規定を模索する場として、三部作の構成を持つギリシア悲劇はこの問題を提起し解決を考察するまさに恰好の舞台を提供している。

『オレスティア』はアトレウス家にまつわる一族の呪いと、それがもたらす悲劇をオレステースの犯す罪と苦難を通して描いている。第一部の『アガメムノーン』においては「ゼウスの讃歌」や「正義の讃歌」に見られるように、人類社会の究極の理想としてのゼウスによる正義の支配がいかにも人間の傲慢 hybris によって妨げられるかその危険を示している。その危険は第二部の『コエーポロイ』に至って氏族倫理の義務としての正義は「父の仇を母に対してその息子が討つ」という悲劇の極みにまで高まる。そして第三部の『エウメニデス』において都市国家の倫理に基づいた正義のあり方が提示される。運命共同体である国家は一人の不正な人間の犯す渎神行為によって滅びる危険がある。パリスはトロイアを滅ぼし、クセルクセースは大ペルシア帝国を傾け、ポリュネイケースはテーバイとアルゴスを存亡の危機に陥れた。「何か悪事を働こうと熱中している船頭と共に船に乗った敬神の人は神の憎む輩と共に破滅する」とエテオクレースは正義の人アムピアラーオスを悼んで述べる<sup>(1)</sup>。アガメムノーン王も正義の名の下に十年に及ぶ大遠征を起こして多数の生命を損ない自分の破滅を招いた。王妃クリュタイメストラは娘を犠牲に供した夫に恨みを晴らす行為を正義の業と強弁し、息子のオレステースも父の仇を母に対して酬いることを正義の行為とする。このようにアトレウス家を代表する三人の王族が、肉親の間で次々と繰り返す報復行為の原因となる正義 dike の本質は一体何なのだろうか、それはゼウスの支配とどのような関係があるのだろうか。

ここでまず正義 dike という言葉の意味を考えてみたい。『オ레스ティア』で主題となる正義 dike には大きく分けて「正義、裁き、報復」の意味がある<sup>(2)</sup>。これらはある時は「正義の女神」、ある時は「正義の裁き」また「正義の報復」というように重複した意味で用いられることが多いので、その前後関係で適宜訳し分ける必要がある。アイスキュロスは正義 dike をこのような意味で使い分けながらアトレウス家の呪いを題材にして悲劇を作り、正義 dike の思想が人の世に悲劇的状况をもたらす可能性を提示したことを論証しようと思う。

これは一見すると逆説的な言い方に見えるだろう。なるほど『オ레스ティア』の中ではコロスが正義 dike を讃え、ゼウスの正義による支配を説いている。しかしそれは人々の理想として敬虔な信仰の中にあるのであり、現実には『コエーポロイ』のコロスが嘆くように不正な者が勝利を得て支配権を握り、正しい者は不正が勝ち誇るのを憤り嘆くことしかできない。アガメムノーンの正義に基づく行動はトロイアにとっては禍であり、裁く者の正義は裁かれる者にとっては不正である<sup>(3)</sup>。ゼウスの正義が社会の支配原理になるためには、世の中にそれを実現する秩序が無くてはならない。ところが当時のギリシアはペルシアのような強力な外敵がその安全を脅かすときには一致団結して難局に当たるのに、その圧力が弱くなると再び内部の抗争に悩まされる。ポリスとポリス、同盟諸国同士、階級間と党派間の争いはひどくなるばかりである<sup>(4)</sup>。ペルシア戦争に参加したことを生涯誇りにしていた詩人にとってこれは大変な苦悩の種であり、人々の抗争の原因を明らかにしてそれを除きたいと切に願ったであろうことは想像に難くない。

ここで結論を先取りするなら、詩人はその原因が正義 dike の思想にあると考えたのである。もっと正確に言うならば、それは理想の神が支配するゼウスの正義ではなく、恣意的な権力が支配する人間の正義の主張である。正義 dike を唱えて独断的に行動する者が、必然的に禍を招き破滅していくのが『オ레스ティア』の主題なのである。ではこの人間の正義 dike とはどのような性格のものなのだろうか。それは「責任を分かち神 theos metaitios」あるいは「我には神の助けあり」<sup>(5)</sup>という尊大な確信に基づいた一方的な正義の主張であって、その実情は苛烈な裁きと報復の連鎖に他ならない。この種の正義が示す人間的な特徴をよく示すのが「オレスティア」の中で用いられている「暴勇 thrasos、不遜 tolma」<sup>(6)</sup>という言葉であり、これらはギリシア悲劇に特有な「傲慢 hybris」に並ぶ重要な概念である。「我には神の助けあり」という考えは元来は個人的な敬虔の念に発する信念であろうが、それが報復の行為と結びつく時には傲慢となる。詩人が「ゼウスの讃歌」において真のゼウスによる正義の支配を求めているのも、現実の世の中は強者による一方的な力による正義が支配しているからであろう。

真の正義は劇の第三部に見られるように、「広場のゼウス」への敬虔に基づき「説得 peitho」を武器とした力に頼らぬ正義、理性の支配する正義である。それは都市国家においては公正な司法権によって守られ、政治形態としては言論による意見の交換と説得を原則とする民主制である。詩人はその理念に立って露骨な暴力による政争を厳しく咎め、題材を英雄時代の伝承にとりながら、劇を通じて現実の社会に強く訴え掛けているのである。英雄時代には美德であった「勇氣」も新しい世の中では「暴勇 thrasos」となり「傲慢 hybris」と同列に悪徳とみなされる。正義の理念は新しいポリス社会に適合した徳目となることを迫られている。

「正義・裁き・報復」の意味を重複して包含する正義 dike はこの劇の中で「正義の名によって敵を裁く行為が実は報復に他ならない」という論理構造を成し、報復は報復を呼んで悲劇的な悪循環を生ずる。これがアトレウス家に伝わる呪いの実態であり、オレステースの母殺しにおいてその呪いの極致に達する。女神アテーナーはオレステースの罪を裁き、「自らの手」による報復行為を否定すると共に、劇の背後にある市民の抗争 stasis をも警告している<sup>(7)</sup>。市民の間の争いを暴力に任せず言論の力で解決しようとする思想は「説得 Peitho」を女神の地位にまで高め神格化するという手法で表現されている。この劇の主題である「報復の正義 dike」の特質は主な登場人物の性格を表す「暴勇 thrasos、不遜 tolma」という言葉が良く示している。この言葉が表現しようとする内容を検討し、アガ멤noon、クリュタイメーストラ、オレステースの三人の行動原理を分析することによって、アトレウス家の呪いの実態と当時のポリス社会が直面する問題の本質に迫り、この伝承を劇化した作者の意図を明らかにすることができるだろう。以下の本文では「正義 dike 暴勇 thrasos 不遜 tolma」と「責任を分かち神 theos metaitios」についての主題の流れを鮮明にするために、関連する引用文と解説はできるだけ註釈に回して本文の記述を簡潔にするよう心掛けた。

## 本文

### ・アガ멤noonの正義 dike と暴勇 thrasos

#### 第一部『アガ멤noon』

アガ멤noonは弟メネラーオスの妻ヘレネーを奪ったパリスを罰するために<sup>(8)</sup>、正義の名のもとに遠征軍を組織して遙かトロイアの地で十年にわたって戦った。彼らは自分たちの名誉を重んずるあまり敵味方の多くの民の生命を失わせ、自分の身にも死を招く結果となったが、それは遠征のためにアウリスの浜に集結させた大船団が逆風に阻まれて永い間船止めを余儀なくされたことに原因があった。従軍の予言者カルキスはこれは女神アルテミスの怒りによる

ものであり、女神を宥めるために王の長女イーピゲネイアを犠牲に捧げねばならないと占い解く。全軍の指揮官としての責任と父親の立場の間に立たされた王は大いに苦悩するが、公的責任を遂行することを選び私的な苦しみに耐える。しかしこれは王妃クリュタイメーストラーの心に深い怨念を残し、王が帰還した後に暗殺される原因となった。第一部「アガ멤ノーン」の冒頭で回顧されるこの挿話の要点は、正義の裁き手たる確信を持ってトロイアに遠征しようとするアガ멤ノーンが、娘の犠牲か遠征中止かという選択の場に立たされた時に、どのような態度を取ったかという点にある。苦悩の末に王が下した決断が思慮を欠いた不遜なものであり、それが彼の滅びの原因となったとこの劇では表現されている<sup>(9)</sup>。

アガ멤ノーンたちは、ヘレネーを奪い主客の掟を守る Zeus ksenios<sup>(10)</sup> に対して罪を犯したパリスを神に代って裁くのだという正義の執行者の確信に満ちて遠征に出立する。しかしあらゆる戦いと同様に、この正義を標榜する戦い<sup>(11)</sup>にも不正義な面が伴う。それはまず、不倫を働き国や船、人を滅ぼす禍いの女ヘレネーに対する批判として現われ、さらにそれはこのような女のために大軍を動かし多数の勇士の生命を無駄にするアトレウス家の王たちに対する民衆の恨みとなって描かれる<sup>(12)</sup>。

出陣に際してのカルカースの占いもこの戦いの残虐な側面を象徴し、仔を持った兎を貪り喰う鷲はトロイアを征服し民衆を殺戮する王たちを指すとされる。しかしこの予言の真の意味はトロイアでアガ멤ノーンが行なう残虐と不敬の行為である<sup>(13)</sup>。王の帰還を待つクリュタイメーストラーが懸念したように、伝令は市民の大虐殺と神殿破壊を誇らしげに報告する<sup>(14)</sup>。出陣に際してのこの予言は、正義の名による報復行為が苛酷に過ぎて、徒らに罪無き者の死を伴うことへの警告である。

女神アルテミスの怒り<sup>(15)</sup>を宥めるためにイーピゲネイアを捧げる犠牲の意味は、不正な目的のために流される民の血と娘の血とを対比させてその選択を女神が王に迫るのだとされる。彼にもし理性と勇気があったなら、このような娘の犠牲までも必要とする遠征を起こす企てに疑問を抱きそれを拒否する選択もあっただろう。しかし全軍の指揮者たる王には遠征の中止は考えられぬことであり、結局は一つの選択しかなかったのである<sup>(16)</sup>。彼は自分の責任ある立場を考慮して遠征中止によって蒙る非難を恐れ、この犠牲を掟 themis であるとして甘受する。

このエピソードの前に、コロスは人智には量り知れぬほど偉大な神ゼウスを讃えて歌う。

「かつて権勢を誇り

いかなる戦いにも勝利するという慢心 thrasos に満ちた者も

その存在すら忘れ去られるだろう。

その後に見れた者も 三本勝負に負けて居なくなってしまった。

ゼウスに衷心から讃歌を捧げる者こそ

全き知恵を得るだろう」(Ag. 168-175)。

以前に権力を有し傲り高ぶった者(慢心 *thrasos* で増長した者)も今はなく、ゼウスに敬虔な者のみが思慮を持つ。

「神は人間が思慮を持つ *phronein* ように導き

『苦しみによって学ぶ *pathei mathos* 』という道理を定められた。

しかし眠りに代えて苦悩が心に滴り落ちる

悲惨な思い出の苦しみが、

そして有無を言わずに分別 *sophronein* が与えられたのだ。

これは神々の強制による恵みなのか

畏るべき舵取りの席に座す方の」(Ag. 176-183)。

思慮のない者は苦悩 *pathos* によって知恵 *mathos* を与えられるのであり、それがゼウスの力づくの恵みである<sup>(17)</sup>とコロスは歌う。

アガ멤ノーンは娘の犠牲を迫られる苦悩の中で罪なき民の死を伴う戦いの意味を学ぶべきであったが、彼は逆に苦悩によって思慮分別を失う。余儀なき状況の圧力に屈して愛娘を奪われた彼は不遜な自棄的な気持で必然の軛を負う。

「強制の頸木を負って以来

心の風向きを彼は吹き変えた

不敬、不浄、不実な方へ。

それ以後は何事でも敢行する *panto-tolmos* 覚悟へと気持ちを変えた。

恥ずべき思いの熱狂は

人間を不遜な気持ちに駆り立てる *thrasynein* ものだから」(Ag. 217-223)。

痛手に傷つき思慮を失った彼は、「万事を敢行する *panto-tolmos* <*tolma*> 自棄的な気持ちに考えを変え、愛娘を犠牲に屠る祭司の役目を務めた。それ以後は何でもやってのけようとする荒んだ「不遜な気持ちに駆られ *thrasynein* <*thrasos*>、遂には勝利に傲った暴虐で神人の怒りを身に招く」<sup>(18)</sup>。王の帰国に先立って勝利を報告する伝令は次のように言う。

「さあ王をお迎えせよ、それがまことにふさわしいからだ、

正義をもたらすゼウスの鶴嘴を以てトロイアの地を掘り返した方を、

そのためその国土はすっかり覆されてしまった。

祭壇も神々の社も破壊された、

そして土地のすべての胤も滅ぼされてしまったのだ」(Ag. 524-528)。

たとえ敵国の神であっても、その神格の中に自分たちの神との共通点を見出して敬うギリシア的敬虔の伝統から見ると、この神殿破壊は許されざる不敬行為である。また敵の国土を荒らし尽くしその民衆の子孫まで根絶やしにする行為は残虐きわまりない<sup>(19)</sup>。イーピゲネイアの犠牲も野生の獣や幼き者の生命を尊ぶ「野獣の女神」アルテミスの怒りに触れたことが発端であった。思慮を失い不遜な憤激に荒れ狂う王はこのようにして自らの破滅を用意する<sup>(20)</sup>。

帰国したアガメムノーンが登場する前に、コロスは 正義 Dike を讃えて歌う。禍いは神を畏れぬ不敬の業から生じ、正義を守る家には必ず幸いが与えられる。

「人々の間に昔から伝わる古い話がある、

人間の幸いが大きく栄えると

子供を産み 子なしで死ぬことはあり得ない。

また良い運命からは一族にとって

飽くなき悲惨が生い出でるものだという。

だが私には他人と違う独自の考えがある。

不敬の業こそが

後になってさらに多くの子を産むのだと、

自分の血筋によく似た子供を。

だが正義を守る家からは

美しい子供が常に生まれる運がある」(Ag. 750-762)。

古い傲慢 Hybris は新たな hybris を生み、さらに敵することも抗うこともできぬ神霊 daimon、すなわち暴勇 Thrasos、禍いの女神 Ate をも生むという<sup>(21)</sup>。

「古さびた傲慢 hybris は

悪しき人の間にあっては

若い傲慢 hybris を生むのが常だ、

いつの日にか定められた

出産の日が来た時には。

また戦うことも争うこともかなわぬ神霊 daimon を

不敬な暴勇 Thrasos を

家にとっては不吉な黒い禍い Ate を

その親によく似た子供を」(Ag. 763-771)。

ここで禍い Ate の本質を暴勇 thrasos として捉え、傲慢 hybris が生み出す禍いに見なしている点は重要である。すなわち、アトレウス家に伝わる呪い Ate の本質は暴勇 thrasos であると言えるだろう。それは自己の正しさを過信して、軽率な判断で行動し、敵に過酷な報復を加えねば止まぬ精神であり、これは無思慮で不遜な傲慢 hybris なのである。この暴勇 thrasos はアガメムノーンの罪の性質を特徴づけ、報復の正義 dike の属性を明らかにするといえよう。

次にこの暴勇 thrasos と同じ性質を持つ悪徳である不遜 tolma について、他の二つの殺人事件と関連づけて述べる。

・クリュタイメーストラの正義 dike と不遜 tolma

彼女も夫を殺害した行為を正義 dike と称してはいるが、それが犯罪であることは明らかであり、それは「大胆・不遜な行為 tolma」として長老たちのコロスによって非難される。過酷な報復が彼女の場合にも滅びの原因となる。

帰国したアガメムノーンは妻の謀略にかかり非業の死を遂げる。しかしそれは彼女にとっても多年の恨みを報いる正当な行為であった。イーピゲネイアの犠牲は、彼女の心の中に「夫を恐れぬ」深い憎悪を宿らせ、彼女は娘の正義 dike のために夫を殺す<sup>(22)</sup>。母として妻としての誇りを傷つけられた彼女の怒りがいかに激しかったかは、兇行後に歓喜のあまり我を忘れて発するゼウスに対する不敬の言葉に現われている。

「私は彼を二度撃った、そして彼は呻き声を二つ立てた後で

手足の力が萎えた。私は倒れ伏した彼に

三度目を重ねて撃ち下ろした、地下に在ます死者の救い主なる

ゼウス（ハーデース）への感謝の捧げ物として。

このように倒れて彼は息を引き取った。

そして傷口から血を激しく噴き出して

血しぶきの黒い雨を私に打ち付けたが

穀物が芽吹いて生長するときに 神の与えた恵みの雨を

喜ぶのにも劣らず 私はそれを嬉しく思った」(Ag. 1384-1392)。

コロスはそれを「大胆不遜なことば thrasy-stomos」(Ag. 1399)であり、自分の夫に対して

そのような「大言壮語をする kompazein」(Ag. 1400)と言い驚いてたしなめる<sup>(23)</sup>。彼女は自分の行為を弁護しながら、遂に自分を報復の霊の化身であると語り、責任を一族の呪いに転じようとする。

「では私が誓って決めたこの定めを聞きなさい、  
私の娘の成就された正義の女神 Dike と  
また禍いの女神 Ate と復讐の女神 Erinys にかけて、  
これらの神々に対して 私はこの男を殺して捧げたのだが、  
恐怖の予感がこの館を支配することを私はさせない」(Ag. 1431-1434)。

-----  
お前はこれを私の仕業だと主張するのか、  
私をアガ멤ノーンの妻などと思ってはならない。  
この死骸の妻の姿を借りて  
古くから居る恐ろしい復讐鬼 Alastor が  
酷い饗宴をふるまったアトレウスに報いて  
この男を殺したのだ、  
幼児のための犠牲の成獣として捧げたのだ」(Ag. 1496-1504)。

このように古い一族の同族殺しにこと寄せて自分の罪を棚上げにしようと強弁するクリュタイメーストラーに対して、報復には報復が加えられるということを忘れぬようにコロスは念を押す。

「この殺人に関してあなたに責任が無いなどと  
証言する者は誰でしょうか。  
どうしてそのようなことが。父祖伝来の復讐鬼 Alastor なら  
手を貸す事もあるでしょう。一族の血の奔流の中を  
黒い殺戮の神 Ares が押し迫り、幼児を貪り喰らった血糊への  
裁き dike を下そうと歩を進めます」(Ag. 1505-1512)。

クリュタイメーストラーの弁明に重ねて一族の呪いを強調するのがアイギストスである。この一族の呪いはアトレウスが王位を巡る争いで弟テュエステースを迫害し、その子供の肉を食膳に供したことが発端であるから、その死を辛くも逃れた末子アイギストスが父の仇を討とうとするのには根拠がある。

「おお正義をもたらす dike-phoros 喜ばしき日の光よ、



今こそ人間の復讐をする神々が

天から地上の苦しみを見そなわすのだと言って良からう。

この男が復讐の女神 Erinyes たちが織り上げた衣に包まれて

横たわるのを見ることは喜ばしい限りだ、

己の父親の手の謀みの償いを十分に果たして」(Ag. 1576-1582)。

だから彼もまた自分が果たした役割が正義に基づくものだと強調するのである。

「こんな次第でお前は傍に倒れているこの男を見ているが、

私もまたこの殺害の正しい立案者なのだ。

不幸な父の第三子である私がまだ襁褓にくるまれた

幼い時に彼は私を父と共に追放した。

だが正義の女神 Dike が成人した私を連れ戻してくれた。

そしてこの男を館の外から仕留めてのけたのだ、

あらゆる奸計の罟を張り巡らして。

だからもう、これで死んでしまっても私は満足だ、

この男が正義の女神 Dike の網に掛かった姿を見た上は」(Ag. 1603-1611)。

しかしコロスはアイギストスの強弁を斥け、彼が自分では手を下す勇気がなくせに正義を唱えて「正義 dike を穢し」(Ag. 1669)、「雌鳥の傍らの雄鳥」のように王妃の陰に隠れながら「高慢に振る舞う(tharsein, <tharsos <thrasys)」(Ag. 1671)<sup>(24)</sup>と非難する。しかし両者の間の力の差はいかんともし難く、コロスは悪人共をなじり民衆の裁きを以て脅すが無益である。彼らは神々の裁きが下ることを信じ、オレステースに望みを託すのみである。そのオレステースは第二部において神々の意を受けた正義の裁きの執行者として登場するが、無力な長老たちはそれまで手をつかねて待たねばならない。

## 第二部『コエーポロイ』

この劇は父王アガメムノーンが暗殺され王権を王妃とその愛人に篡奪されたエーレクトラーが、無き父の墓に詣でて自分の悲運を嘆き、悪人共を罰して王家を立て直してくれる弟オレステースの帰還を祈る場面から始まる。

エーレクトラーと侍女たちは父王の墓の前で不正の支配と自分たちの惨めな境遇を嘆く。不正な手段で王国を奪った者が裁きを受けずに傲り栄える時、その国には正義を軽視する風潮が生ずる。だが無力な彼らは自分たちに代って裁き、報復する者が現われるように祈るのみであ

る。父王の墓の前で何を祈るべきかエーレクトラーが相談すると侍女は次のように答える。

「彼らの許に神々あるいは人間の中から、どなたかが現れるようにと」。

「それは裁き手 dikastes か、あるいは裁きをもたらす者 dike-phoros

のことを言っているのか」。

「はっきり申し上げるなら、殺して仕返しをなさる方のことです」

(Cho. 119-121)。

ここで明らかにされているのは、正義 dike の行為は裁きであると同時に報復でもあり、それは殺人行為に対して殺人で仕返しをすることだと明確に認識されている点である<sup>(25)</sup>。

父王の霊にこの願いを熱心に祈る彼女たちの前に、その様子を窺っていたオレステースたちが姿を現し身許を明らかにする。永年の別離の末にやっと再会を果たした姉弟は、積年の悲願が成就するように改めて祈り求める。

「あなたは信頼できる弟、あなただけが私の頼り、

権力の神 Kratos と正義の神 Dike と最高神ゼウス様との御三体が

一緒になってあなたを助けてくださるように」(Cho. 243-245)。

このように正義は権力と並びゼウスにも匹敵する神格としてその助けが祈り求められている。この期待を実現すべきオレステースとエーレクトラーは再会し、姉弟は正義の回復の願いをこめて墓の前で交互に歌う。姉弟が交互に歌う哀悼歌 Kommos ではゼウスの定めた支配者を暗殺したクリュタイメーストラーの行為は神人の許さぬ「不遜な行為 tolma」として非難されている。

オレステースは嘆き歌う。

「そのことばは矢のように耳の奥底まで届いた、

ゼウスよゼウス、地の底から送り出し給え、

遅れて罰を与える禍い Ate を、

人間の放縦 tlema と悪辣な行為 panourgon の手に

この願いは生みの親に対してさえも果たされるだろう」(Ch. 380-385)。

エーレクトラーも彼に続いて嘆き歌う。

「おお憎むべき不遜極まる pan-tolmos 母よ、

忌まわしい葬礼により

国王に伴う市民たちの葬列もなく

哀悼の儀礼もなく

嘆きの礼も尽くさずに、夫を不遜に etlen 葬った」(Cho. 425-428)。

「不遜 tolma」という概念は、「不遜この上ない panto-tolmos」と言う強調形でここに表現され、カッサンドラーも王妃の忌わしい兇行を予言するときにこれを用いているので、「暴勇 thrasos」と同様に重要である。母親の tolma に対する怒りと自分たちの惨めな境遇 atimia への嘆きは、姉弟によって交互に歌い上げられながら彼らの報復の意志を高めて行く<sup>(26)</sup>。

この憤激はオレステースが、父王の遺体に加えられた不敬行為 atimia を知るに及んで頂点に達する。死者の祟りを封ずる呪いとして行なわれた遺体損壊 maschalismos はその残虐性のために、未だ見ぬ母に対する彼の憎悪を決定的なものにする<sup>(27)</sup>。そして彼は自分の手で報復を果す決意を一層固め、息子が父の仇を母に酬いるという人間の最大の悲劇に向う。

姉弟の嘆きと憤激が最高潮に達したところで「報復の正義」の意志が決然と述べられる。オレステースが「戦いの神 Ares が戦いの神 Ares とぶつかりあうのだ、正義 Dike と正義 Dike とが」と叫べば、エレクトラーも「いおー神々よ、正しく endikos 裁き dike をお付け下さい」と応ずる。(Ch. 461-462) ここに到ってはもはや「正義」は「正義の裁き」に止まらず「報復の裁き」にまで達している。対立する双方の憎しみが敵意となり報復の意志となって激突しようとしている。この意志は姉弟が自分たちの惨めな境遇と父王の酷い死に方を嘆くことによって固まるから、彼らは墓の前で交代に長い哀悼の歌を繰り広げる。

ここでコロスは、か弱い女性の心を迷わせ、不遜な恐ろしい行為をさせる「愛欲 eros」について歌う。その行為は天地の異象や怪物にも増して恐るべきものであり「不遜な行為 tolma」であるとされている。

「しかし思い上がった男の高慢 hypertolmos phronema を誰が語り得ようか、  
また向こう見ずな tlemon 女たちの心に潜む大胆極まる愛欲 pan-tolmos eros を。  
女を支配する愛なき愛が共に連れ添う配偶者を押しひしぐ、  
怪物も人間も変わりなく」(Ch. 594-601)。

コロスはこう述べた後で、クリュタイメーストラーの行為の恐ろしさを、思慮を失って罪を犯した神話上の女たちの例を引いて較べている。それらの女たちは弟に味方して我が子を殺したアルタイアー、敵の王への恋のために父ニーソスの死をもたらしたスキュラ、妻を忌避する夫たちを怒って皆殺しにしたレームノスの女たちであるが、彼女たちは神に憎まれて皆滅び去った。コロスはこのように王妃の行為を非難して言う。

「かくも呵責なき苦しみを想起させた以上、  
館が拒絶すべき厭わしい婚姻について語らねばならぬ。

槍を揮う武人に対して、敵にすら崇敬されて当然の夫に対して  
女が心に企んだ陰謀について。  
欲情に燃え立つことなき家を私は尊ぶ、  
大胆不遜ではない a-tolmos 女性の熱情を」(Ch. 623-630)。

上に述べられているコロスの女性観は重要であり、クリュタイメーストラーとこれらの女性たちの恐るべき行為の特質は「大胆不遜 tolma」という言葉で定義することができる。また反対に「大胆不遜ではない a-tolmos」という言葉は男の場合には「勇気に欠ける、臆病な」という意味になるのに反して、女性の場合は「穏やかな、内気な、貞淑な」という意味合いを帯びるからである。これはクリュタイメーストラーの気質の真髄を明確に示す言葉といえるだろう<sup>(28)</sup>。

この非難の後に改めて報復の掟が述べられ、正義 Dike はゼウスへの敬虔を踏みにじる者を罰することが強調される。そしてクリュタイメーストラーへの報復が正義の行為であることが確認されるのである。

「正義の女神 Dike の基礎はしっかりと据えられている、  
剣を打ち出す運命の女神 Aisa は早くからそれを鍛え上げている。  
その子供を疾うに館の中に導き入れて、  
いつの日にか昔流された血の穢れを償わせる、  
深い謀を巡らす高名な復讐の女神エリーニユスは」(Ch. 646-651)。

#### ・オレステースの正義 dike と不遜 tolma

謀みによって城中に入ったオレステースたちは計略によってアイギストスを討つ事に成功するが、神霊がこの仇討ちに助力すること「天佑神助 theos metaitios」をほのめかす表現が用いられている<sup>(29)</sup>。

「クリュタイメーストラー様はどこに、何をしておられるのか、あの方の頸が正当にも pros dikes 撃たれていま落ちようとしている瀬戸際だというのに。--- 死んだ方々が生きている者を殺したのだと私は申し上げております」(Ch. 883-886)。

王妃の問いに対する召使いのこの表現はこれが正義の裁きであり、その行為を死者たちすなわち殺されたアガメムノーンが助けていることを示唆する。事態を悟ったクリュタイメーストラーは、白刃を振りかざすオレステースに向かって胸を露わにし、母親への本能的な畏敬に訴えて命を乞う。動揺する彼はピュラデースの意見を求めるが、この重要な場面で一言だけ発言

して神託への義務を迫る友の言葉は、彼の背後に神が控えていることを暗示する<sup>(30)</sup>。

「ではどうなるんだこれから、ピュートーで授けられたロクシアース様のお告げと我々が立てた真実の誓いは。誰もが敵だと思え、神々を敵にするよりは」  
(Ch. 899-902)。

オレステースその言葉に気を取り直し、釈明しながら母に対して刃を揮う。

「それなら運命 Moira がこの死の定めを取り計らったのだ。

私ではなくて、あなたがあなた自身を殺すのです。

父親の恨みを含んだ犬たち（エリーニウス）をどうすれば逃れられるでしょう、もしこれを止めたなら。父の運命 Aisa があなたにこんな死に方を定めたのです。殺してはならぬ人をあなたは殺した、だから受けてはならぬ報いを受けなさい」  
(Ch. 911-930)。

兇行後に彼は、人々に父王が暗殺された時の着衣を指し示しながら、自分の行為の正しさを力説する。彼は母親の「不遜な行為 tolma」を非難し、神々に憎まれた母を殺すことは正義に背かないと主張する。

「すべてを見そなわす父なる太陽が私の母の不浄な行為をご覧になるように、そしていつか私の証人として立って下さるように、

私がこの母親の死の定めを正当に endikos 追い求めたのだと」(Ch. 985-989)。

「どうお思いですか、海蛇かそれとも蝮の性質を持ち、

他人を咬まなくてもただ触れただけで爛れさせることが出来る、

大胆不遜 tolma な正義に外れた慢心 ekdikos phronema によって」(Ch. 994-996)。

大胆不遜な高慢な心を持つ女性は、このように恐るべき大罪を犯す素質を備えているとここで主張されている。先に列挙した神話上の悪女たちの典型がクリュタイメーストラーであり、その罪に対する正義の裁きは死あるのみと断言されている。

しかしオレステースはアイギストスを討ち果たす報復行為に対しては、法の裁きも何の咎も受けることはないと考えている。彼はアガメムノーンの嗣子として、篡奪者に当然の正義の制裁を加えたのであるから。

「アイギストスの死の定めについては何も言いません。

掟のとおり、彼は名誉を汚した男が受けるべき裁き dike を受けたのですから」

(Ch. 989-990)。

しかし彼は自分の行為の正しさを力説するその間にも、母親の血を流したことについて法の

裁きを受け、また罪の悩みから狂気に陥るだろうとはっきりと自覚している<sup>(31)</sup>。

「しかし私がまだ正気でいる間に、親しい人に告げておきます、

私は母親を殺しはしたが、それは決して正義 *dike* に外れていないと断言します。

父を殺した穢れと神々の憎しみを受けていた人なのだから」(Ch. 1027-1028)。

そして自分の正しさを主張すればするほど生みの親を手にかけてしたことへの罪の自覚が深まる。「この勝利の結果としてただ嘆かわしい穢れを身に得ただけだから」(Ch. 1017)。

遂に自分の行為がアポローンの強制による逃れようのない使命であったことを述べると共に、それが今まで母への非難に用いていた「不遜な行為 *tolma*」であることを認めるのである。

「そしてこの大胆な行為 *tolma* を私に告げて行わせた張本人は、

ピュートーの予言者ロクシアース様なのだ。

御神は私にこの悪事の責めを免れるとお告げになったが、

もしそれを無視したならば--- その罰は口にするまい。

その苦しみを矢で射当てることが出来る者は誰もいないから」(Ch. 1029-1033)。

このように今までクリュタイメーストラーの行為に対して何度も用いられて来た「不遜 *tolma*」がオレステース自身の行為にも向けられていることは重要であり、これは己れの犯した罪の自覚の深さを示す言葉であるといえる。彼は自分の罪に対する良心の苛責の結果として狂気を得て、早くも肉親の血を流した罪を追求する復讐の女神の姿を幻覚として見る<sup>(32)</sup>。

「ああ、召使いの女たち、あれはまるでゴルゴーンのような、

黒い衣を着て身にはびっしりと蛇をまとわり付かせている。

--- これは私には幻影とは見えない、これは明らかに母親の恨みを籠めた犬共だ。

--- お前たちにはこれが見えないのだ、でも私には見える。私は狩り立てられて、

もうこれ以上ここには居られない」(Ch. 1048-1062)。

狂気の錯乱に取り憑かれたオレステースには、コロスには見えない復讐霊エリーニュスの存在が明確に見えている。オレステースだけに見えるこの内心の世界は、第三部になるとアテーナイにおける法廷場面として舞台の上で具体的に観客の前に提示される。自らの手による報復の最も悲劇的な結末である母殺しの罪を犯した彼は、贖罪のために嘆願者としてデルポイに向い潔めの儀式を受ける。

### 第三部『エウメニデス』

(デルポイのアポローン神殿で嘆願するオレステース)

オレステースは肉親の血を流した罪を贖うためにデルポイに赴き、アポローンの神殿で潔めの儀式を受ける<sup>(33)</sup>。劇の冒頭で巫女が語る神託所の権威移譲に関する伝承は、この祭祀場が平和に発展して来たという異説を採択した詩人の意図を反映している<sup>(34)</sup>。復讐霊エリーニュスが「恵みの女神」エウメニデスと名を変えてポリスの守護霊となるというこの劇の導入部にふさわしい解釈である。

「最初にこの祈りでは神々の中でも初代の予言者である大地の女神 Gaia を崇め奉りましょう。その次には掟の女神 Themis を、この方が母神の神託の第二代の座にお就きになったと伝えられます。第三代の務めには、力によらず望まれて、大地女神の別のお子様であるティターン族のポイベー Phoibe がお就きになりました、そしてこの地位をポイボス Phoibos (アポローン) に誕生祝いとしてお譲りになりました。この方はポイベーの名を取ってポイボスと呼ばれるのです」(Eu. 1-7)。

アポローンは嘆願者オレステースに対して、自分が与えた神託のゆえに彼が罪を犯したのであることを認め、その弁護をすることを約束する。ここには「責任を分かち神 theos metaitios」<sup>(35)</sup>という信条が神の口を通して述べられている。

「決して見棄てたりはしないぞ、最後までお前の守護神として、傍に立つときも遠く離れているときもお前の敵どもに甘い態度は見せないぞ。--- そもそも母の生命を奪うようにお前を説き伏せたのはこの私だから」(Eu. 64-84)。

(アクロポリスのアテーナー女神の神殿で嘆願するオレステース)

オレステースはアポローンの指示に従い女神アテーナーの裁きを受けるためにアテーナイに向かうが、そのエリーニュスに追い回される苦難の旅の間に彼は罪の贖いをする。これは宗教的な浄めをデルポイで彼が受けた後に辛苦を嘗めながら各地を放浪する間に、人々との交際を断たれ社会から追放される刑罰が次第に緩和され犯人が社会に受け入れられるようになった経過を意味するのだろう<sup>(36)</sup>。彼はアクロポリスにある女神アテーナーの神像に縋り保護を求めるときに、自分はもう血に穢れた者では無く人々に汚染の害を及ぼさないことを強調する。その上で彼は法的な裁きを受ける事が許されているのである。

「アテーナー女神様、私はロクシアース様の命によりやって参りました、復讐霊に悩む者を慈しみお迎え下さい。私は浄めを求める身でも穢れた手をした者でもありません、その穢れは他人の家や人々の間を経巡る中にもう薄くなりました」(Eu. 235-239)。

「なぜなら血は眠りこみ私の手から消えていくからです、母殺しの穢れがまだ新しい中にポイボス様の祭壇のもとで浄めの仔豚の血によって洗い清められました。だから私が近づいた人々はその交わりで誰も被害は受けませんでした、それを始めから話すなら長い物語になるでしょう」(Eu. 280-285)。

この訴えに対して、もし彼の言い分が通るなら古い制度は全く混乱するとエリーニュスのクロスは言って、自分たちの職務の重要性を強調する。しかしアテーナー女神の調停の申し出に従いエリーニュスはその裁きを受けることに同意するが、それは自分の任務が正義に基づいた古い権威を持つという確信があるからである。もしこれが覆えるなら正義は滅び、親はその子供によって酷い目に遭うだろうと彼らは警告する。

「今や新しい制度によるどんでん返しだ、もしこの母親殺しの非道な言い分が勝つならば、このような行為は全ての人間を放縱 *euchereia* で団結させるだろう」(Eu. 490-494)。

「誰も叫んではいけない、不幸に打ちのめされながら、この言葉を叫び上げて、おお正義よ、おおエリーニュスの座よと。こういう言葉を多分苦難に遭ったばかりの父親や母が悲嘆に暮れて言うだろう、正義の館が崩れ去ろうとしているのだから」(Eu. 513-516)。

エリーニュスたちは自分たちの血の報復の職務は運命 *Moirai* によって授けられた由緒の古い栄職であると誇り、血の穢れを自分たちが引き受けているためにオリュムポスの神々がそれを免れているのだと言う。彼らの任務は「自らの手」による無思慮な殺人を追求すること、敬虔な正義 *Dike* を尊ぶ者に幸いを与え思い上って無思慮な者を滅ぼすことである。節度と中庸は正義に基づく徳であり、そこから神々・両親・他国人に対する敬虔が生じるが、不正で不敬な念からは傲慢・不遜・無秩序が生じる。彼らは恐怖によって節度・中庸を守らせ、それを守る者には幸福を約束するが、傲慢・不遜・無秩序には峻厳な罰を与える<sup>(97)</sup>。

「恐れというものが *to deinon* 良いことも時にはある、心の監督官が見張りの座についている必要もある。

窮境によって分別 *sophronein* を得ることは有用だ」(Eu. 517-521)。

節度と中庸を尊ぶことは道德の上からだけではなく、政治道德の観点からも重要なのである。次の表現は氏族社会の血族の倫理を叫ぶエリーニュスの言葉としては、政治的な意味合いを含むために注目に値する<sup>(98)</sup>。

「放縱な生活も服従する生活も甘受してはならない。



神はあらゆる中庸に力を授け給うた。

--- まことに傲慢は不敬の子供だ、だが健全な心からは

全ての人に愛され祈り求められる幸いが生ずる」(Eu. 526-532)。

・アテーナーの裁き dike と市民の暴勇 thrasos

女神アテーナーが裁判官を務めるアテーナイのアレイオスパゴスの法廷において、アポローンとエリーニュスたちはオレステースを挟んで論争する。両者はそれぞれ父と子、母と子の関係を重視する立場に立って、母が父を殺した時に子を守るべき義務について論じ合う。両者の議論が独断的なもの、論点の対照を明確にするためであろうし、一方的に正義を主張することの誤りを印象づける効果を与えている。

まずアテーナーによって法廷は開会され、女神の定めた掟に則って正しい判決の裁き dike が下されることが宣言される。アポローンは自分が法廷に立つ理由を述べ、それは被告の母殺しについて「責任を負う aitian echein」(Ag. 580)からだと言明し、ここにも「責任を分かち神 theos metaitios」の考えの根拠が示される<sup>(39)</sup>。またオレステースはエリーニュスの反対尋問に対して、アポローンの説得と託宣によって母を殺したことを答える。エリーニュスの尋問を引き継いだアポローンはその神託がゼウスの命令に基づくことを明らかにする。

「この正義 to dikaion の主張がどれほど強力であることを知れ、

我が父の意志に聴き従う様にお前たちに告げる、

誓言といえども決してゼウスより強力ではないのだから」(Eu. 619-621)。

即ち妻と夫とは血のつながりがないから夫殺しを追求するのは自分の職務ではないと否定するエリーニュスに対して、ゼウスから王笏を授けられた名誉を有する男子を殺した女を討つのはゼウスの意志と正義に適う行為であるとアポローンは主張するのである。

「高貴な生まれの者が死ぬのは同じ事ではないのだ、

ゼウスの授ける王笏の名誉を受けた身が、それもまた女の手などに掛かって」

(Eu. 625-627)。

それに加えてアポローンは「母親は父親から受けた子種を育てるだけの存在である」(Eu. 659)と言って母と子の血縁関係までも否定し、その証拠として傍らに控えるアテーナー女神を示す。アポローンは母と子の血縁関係よりも夫と妻、父と息子の関係を重視する。エリーニュスは氏族社会の掟である血の倫理を主張し、アポローンは都市国家の基盤である家と婚姻の權威を神聖視するのである。

アテーナーは、二つの義務の間に犠牲となったオレステースを公正な司法の場として尊ぶべきアレイオパゴスの法廷で裁くことで問題の解決を示そうとしている。母の血そのものに対するオレステースの罪はすでにデルポイで潔められているのだから、女神の裁きは彼の有罪を主張するエリーニュエスの訴えの当否に対するアテーナーの判断を示す。

アテーナーは裁きの票が投ぜられる前に、アレイオパゴスの法廷の由来を述べる<sup>(40)</sup>。この丘がアレス神に捧げられ神々に慕われている事実は、この法廷の裁く殺人事件に関する決定を神聖な権威あるものとする力があつた<sup>(41)</sup>。しかしその背後にある歴史的事実と、この法廷が殺人事件を裁くということが民主政治の象徴ともなっている。民主政治の理念が神々の神聖と権威を受けているのである。

「この丘（法廷に）において市民たちの畏敬と畏怖の念が相伴って、昼も夜も変わらなく不正が行われぬように見張るだろう、市民たち自身が悪しき手本を取り入れて法律を改変せぬように。澄み切った水も泥土に汚されるならもはや飲用には適さぬように」(Eu. 690-694)。

さらに女神は双方の主張に関連して無秩序 *anarchia* も専制 *desposyne* も否定する。敬虔な中庸の精神、穏健な民主政体を守るように勧める女神の言葉は<sup>(41)</sup>、その話題の転換が唐突なために、この劇の主たる関心がポリスとその政治体制に向けられているという印象を強く与える。ここに述べられた政治体制への警告は先にエリーニュスが述べたものと内容が一致している<sup>(42)</sup>。アテーナーが守ろうとしている都市国家を支える倫理は、根底においては氏族社会が尊重してきた倫理と共通する性格を持っているのだろう。詩人はその共通点を鋭く見抜いて指摘しているのである。アテーナー女神は市民たちに説く。

「無政府状態にも専制政治にも身を委ねない現状を維持し尊重するように私は市民に望む、また畏怖の対象までもすっかり都の外に追い出さぬように。

何も恐れ憚るものが無い人間の誰が正義の裡 *endikos* に止まるだろうか」(Eu. 696-700)。

アテーナー女神の勧めの言葉の後で裁判官たちによる票決が行われる。アテーナーを加えた十二人の裁判官の票は、オレステースに投じた女神の票のために有罪と無罪が同数になり、規定によってオレステースは無罪放免とされる<sup>(43)</sup>。このエピソードの意味はアテーナーが裁判官として審理に加わることにより、この法廷の権威を神聖なものとして一方的な正義を主張するどちらの側も決定的な勝利を収めぬためである。

「これは私の仕事、最後の裁きを下すのは、私はこの票をオレステースに加えよう、

私を生んでくれた母親など居ないのだから、私は万事に男性を支持する、  
結婚生活に入る以外なら、心の底からそう思い、私はひたすら父親側に付く。  
だから家の守り手である夫を殺した女の死の運命など私には気にならない。

オレステースは、たとえ同数の票決であっても、勝ちとする」(Eu. 734-741)。

このようにアテーナーはオレステースに赦免を与える票を投ずるが、その理由をアポローンが主張したのと同じように母子の血縁を否定する論理に置く<sup>(44)</sup>。家を守る男性を尊ぶアテーナー女神の票を加えた同数の票決により無罪放免された<sup>(45)</sup>オレステースは、感謝と共にアルゴスとアテーナイの間の同盟を守ることを誓う。

「私はこの国とあなたの民に対して、今後永久に時の続く限り、誓いを立てて  
故国へと向かいます、私の国の政治の舵を操る者は誰もこの土地へと押し寄せて  
良く調えた槍を向けることなどは決してしないことを」(Eu. 762-766)。

この言葉も劇の時代的背景を良く説明する<sup>(46)</sup>。この劇の上演された年の前後は非常な政争と戦争の危険が迫っていた時であった。アイギナが攻略され、長壁が建造され、エジプトに遠征軍を送りエピアルテースが暗殺された。アテーナイはアルゴスと同盟し、ペロポネネーソス同盟との対立は必然的に国内の保守革新の対立と結び、市民の間の抗争は絶えなかった。だからエリーニュスに対する和解の呼び掛けは、国内の争いを集結させ、民主政治原理に立って平和を回復し、外敵に対して一致団結させようという詩人の願いを表すものと理解できる。だからエリーニュスに対して女神が和解を呼びかけて、共にポリスの平和を守るように勧める。

「また私の持つこの土地へはどうか血みどろな砥石、  
若者たちの心を騒がす争いの種を投げ込まぬように、  
酒も飲ないのに激情 *thymoma* に狂乱して。  
また(闘鶏用の)雄鶏から引き抜いた心臓を投げ込むようにして、  
私の市民の間に同族間の戦いの神 *Ares* を住ませ

相互への暴挙 *thrasys* を決して引き起こさないように」(Eu. 858-863)。

アテーナーはこのような市民間の抗争の一因が激情 *thymoma*、暴勇 *thrasys* (<*thrasos*)だと見ているのである。そしてこのように国内の争いを止めて国外の敵に対する正しい戦いに備えるように勧める<sup>(47)</sup>。国内における争いは暴力に訴えるべきではない。その点で両方の党派を非難したアテーナーは、民主政治の精神である説得の女神 *Peitho* の名において、エリーニュスにこのアテーナイの町に住み自分と共に社を分け合う様に勧める。こうして報復霊は民主主義の守護霊となるように説得される<sup>(47)</sup>。

票決に破れた復讐霊エリーニウスは古い神々である自分たちの受けた不名誉を嘆き、憤りの呪いの声を上げるが、アテーナー女神に説得されて恵みの女神エウメニデスとなり、アテーナイの守護神となる。アポローンの託宣がゼウスの意志であるのと同様にアテーナーの裁きもゼウスの意志に基づくものであった。古き報復の掟をポリスの正義の法に変え、国内の争いを集結させて平和と繁栄を求めさせるのもゼウスの意志なのである<sup>(48)</sup>。

こうしてエリーニウスはアテーナーの説得を受け入れて、争いと報復の象徴から恵みの女神エウメニデスとなり、アテーナイ市に永遠の平和を約束してその守護神となるのである。かれらは民主政治の守護者たる「広場のゼウス Zeus agoraios」(Eu. 973)の支配の下にこの国を祝福する。市民の間の抗争 stasis (Eu. 977)も仕返しを求める怒りの仕返しの殺戮(Eu. 981-2)もこの都を襲うことがないように。そしてこの繁栄をエリーニウスの古くからの任務の代わりにゼウスはエウメニデスに託し、新たに運命の女神モイラと取り決めをする。国内の争いを終結させて民主政治の原理に立って平和を回復し、外からの危険に対して市民を団結させようという作者の願いをも示しているのだろう。

ポリスにおける争いは暴力に訴えては解決できない。その点で両方の党派を非難した女神は市民の間に暴勇 thrasos による抗争 stasis をもたらさぬようエリーニウスに頼み、民主主義の精神である説得の女神 Peitho の名によってアテーナイの守護神になるように説く。そして彼らは怒りを収めて民主政治の守護者「広場のゼウス Zeus agoraios」の下に、市民の間の抗争、報復の殺戮からポリスを守るエウメニデスに変る<sup>(49)</sup>。古き報復の掟を正義の法へと変えて、国内の争いを終結させようとする女神の勧めも結局はゼウスの意志であった。ゼウスの正義を守ると言いつつ過誤を犯し続けたアトレウスの一族も、より高い次元でゼウスに用いられ、その目的に仕えたと言えるだろう。

## 結び

以上に述べたように、「オ레스ティア」三部作中の三人の主要な人物の行為を正義 dike を手がかりにして検討し、「報復の dike」の持つ問題性が「暴勇 thrasos」と「不遜 tolma」で特徴づけられることを論証しようと試みた。この言葉は本来「勇気」を意味する言葉であるが、正義 dike との関連では否定的な意味を示しているのは興味深い。伝承の扱い方がホメロスとアイスキュロスで異なっていることも考慮に入れると、同一の行為が時と所を違えたと「美德 arete」が「傲慢 hybris」にもなり得ると言える。

アガメムノーンの「暴勇 thrasos」に始まり、アテーナーの説得の言葉の中の「暴勇

thrasos」に至って、この劇の主題が「thrasos と tolma」に示される「軽率で尊大な、不遜な慢心による激情」を動機とした「正義の裁きと報復行為」を巡って展開していることが分かる。理想的なポリス社会と民主政体を内部から崩壊させるのは、このような激情に発する報復行為の絶え間ない応酬であり市民間の抗争である。英雄時代の精神や部族社会の掟はまだ社会の中に根強く残っていて、そのような私的な力の行使を容認し奨励する。

詩人は当時の社会の病根を鋭く見抜き、アトレウス家の呪いの本質を追求しながらその実は、社会に抜き難い勢力を持っているこの思想の誤りを指弾しているのである。観客は彼のこの指摘を悲劇の中に読み取りはしたであろうが、それをどこまで現実の社会の病根として意識できただろうか。

トゥキュディデースもこの点を指摘する。「内乱は残虐の度を増しつつ荒れ狂った。--- やがては言葉すら本来それが意味するとされていた対象を改め、それを用いる人の行動に即して別の意味を持つようになった。--- 無思慮な暴勇 tolma が愛党的な勇気と呼ばれるようになり、先を見通して躊躇うことは臆病者のかくれみのと思われた」<sup>(50)</sup> (Th. 3. 82)。作者の憂慮は事実となってここに現われている。

しかしこのような訴えかけは少数の心ある人々にしか理解されず、多くの人は単に作品の上に現れる神の正義、敬虔、平和の讃歌を聴いて満足し悲劇に感動しただけだろう。だが聞いても理解しない者に強く迫ればかえって反発を受け、新たな争いと迫害を生ずるだけであっただろう<sup>(51)</sup>。

#### 註

- (1) Aescylus, *Septem*, 602-604. 正義の人、予言者アンピラーオスは誓約を守り、その意に反してテーバイ攻撃に参戦し、大地に吞まれて死んだ。
- (2) dike の意味は right, judgement, punishment に分け得るが、人が人に対して加える罰は、この劇では報復行為として現れるために、このように分ける。
- (3) Hesiod, *Erga Kai Hemerai*, 202ff.
- (4) Thucydides, *Historiae*, I. 23 ff. ペルシア戦争の直後から、アテーナイ陣営とペロポネーソス陣営とはそれぞれ多くの都市を味方に引き入れて戦った。
- (5) 「責任を分かち神」あるいは「助けを与える神」"theos metaitios" (Ag. 811)であるが、困難な闘争や仕事において「神が助けを与え給う、神は我が側に立つ」という信念の下に努力を尽くすことは、人間の傲慢を示すのではなく、古代人の宗教観からすれば自然な敬

度な態度である。

「オ레스ティア」においては、アガメムノーンは「ゼウス・クセニオス」に代わり正義を執行し、オ레스テースは「家を守るゼウス」の代理人として母を殺す。クリュタイメーストラもアイギストスもそれぞれ神の加護の下にある正義の執行者としての言い分を持つ。これらの人物の標榜する「神の助け」の信念には偽りは感じられない。

cf. "aitios, paraitios, symmachos". (Ch. 2, 19, 812, 910), Fraenkel, II, p. 371. (註 35)

- (6) thrasos (over-boldness, rashness, insolence, Lat. audacia),  
tolma (over-boldness, recklessness, Lat. audacia)

両方の言葉は良い意味では「勇気、大胆、元気」であるが、否定的に使われると「傲慢、高慢、不遜、暴挙、軽挙、短慮」というような意味になる。この悲劇では主人公の破滅をもたらす原因として、その性格描写、行動原理の特徴を捉える重要な用語として否定的に使われているので、それぞれの用法に応じて流動的に訳した。訳語を以て主人公の性格と行動の解釈また説明としてある。

- (7) エウメニデスと変身したコロスが祈り市民を祝福する。「禍いに飽きることがない内乱 Stasis がこの都の中で雄叫びを上げることが決して無いように」(Eu. 976-978)。

Page は内乱を Stasis と大文字で表記している。これは神格化して「内乱の女神」とでも訳すべき解釈であり、この言葉がいかに重要視されているかを良く示している。

「私の市民たちの間に血族同士の戦乱 Ares とお互いに対する暴勇 Thrasos を住まわせてはならない」(Eu. 862-863) というアテーナーの勧めもこれと同じ発想から来ている。すなわち「暴勇から内乱と戦乱が生ずる」というのが詩人の考えであろう。神話時代に題材を採りながら同時代の共同社会に内在する根本的問題に目を注ぎ政治制度と外交にまで言及しているのがこの劇の特色である。(Conacher, *Aeschylus' Oresteia*, p. 197)

- (8) 伝承によれば、パリスはイーデーの山中で羊を飼っているときに三人の女神に会い、その美を判定せよとの求めに応じてアプロディーテーを選び、褒美として世界一の美女ヘレネーを与えられた。だがトロイア方に戦争の責任を負わせるこの劇の筋書きの中では、この伝承は問題とされていない。

- (9) トロイアへ向けて出陣するためにアウリスの海岸に集結したギリシア軍は逆風に阻まれて出航が出来なかった。カルカスの占いによってその原因はアガメムノーンがアルテミスの怒りに触れたためであることが分かった。

- (10) 「客人を歓待する神ゼウス Zeus ksenos」に対するパリスの罪は各所に言及され、それ

がトロイア戦争の最大の原因とされている。国際法が不備であった古代においては、神の権威に訴える以外に国家間の信義を保障する手段は無かったのである。「そのようにアトレウスの子らをアレクサンドロス（パリス）に向けて、いと力強き主客の掟を守るゼウス ksenios Zeus は遣わされる、男多き女のために」（Ag. 60-62）。

「神々の誰も彼の懇願に耳を貸さないで、そのような悪事に携わった不正な男を滅ぼす。そのようにパリスもアトレウス家の子らの家を訪れながら妻を盗んで賓客の卓を辱めたのだ」（Ag. 396-401）。cf. (Ag. 362-364), (Ag. 701-705)

- (11) アガ멤noonたちは正義の戦いを標榜しているが、その実は報復の戦いであり、これをトロイア側から見れば彼らの役割は懲罰者また復讐者にすぎなかった。「高き処でこれ（驚の訴え）を聞く者、アポローン或いはパーンあるいはゼウスがこれらの天の寄留者である鳥の嘆きの鋭い叫びに（耳を傾け）、罪を犯した者たちに後になって罰を与えるエリニウスを遣わす」（Ag. 55-59）。

- (12) 「恨みを籠めた市民たちの言葉は重い、それは人々が認める呪いの負債を支払う」（Ag. 456-457）。パリスやヘレネーに向けられた市民たちの批判は、すぐにその無謀で残虐な戦争を企てた指導者たちに向かう。

- (13) L-Jones, *The Guilt of Agamemnon*, C. Q., XII 1962, 189.

- (14) 神殿破壊は非常な罪悪であった。E. Fraenkel, *Agamemnon* II, 1962, 266, cf. A. Pers. 812.

- (15) アルテミスの怒りについてはソポクレスが伝えている。それによるとアガ멤noonはかつてアルテミス女神の神域の森で牡鹿を仕留め、その折りに尊大な言葉を洩らした ekkompasai ので女神の怒りを招いた。その罪を贖うためにアウリスに船止めを余儀なくされ、娘を犠牲に捧げるように強いられたのである。（Soph. El. 563ff.）

cf. "kompos, kompazein"、池田黎太郎『テーバイを攻める七人の将軍』の技巧、滅びに至ることば、『エポス』第5号、p. 38-p. 53.

しかし Kitto の解釈では、女神はこの戦争を正しいものとは考えず、不正な目的のために多くの無辜の民の血を流す戦いと、娘の生命とを選択するように王に命じたのである。しかし王は部下の将兵の怒りを恐れて娘を犠牲にし、その結果我が身に破滅を招いた。（Kitto, *Form and Meaning in Drama*, pp. 3-5）この解釈に従えばアイスキュロスはこの遠征そのものを不正義の戦いとして設定したのであり、アガ멤noonたちがしばしば口実にする「神の正義」の偽善性は一層強まると言えよう。

(cf. H. D. F. Kitto: *Form and Meaning in Drama*, 3-5)

- (16) アガメムノーンは娘を犠牲に捧げる決心をした時に次のように言う。「風を止めるための乙女の犠牲と血を熱心にひたすら求めるのは掟に適った（やむを得ない）ことだ、『良いようになれ』（と言うほか無い）のだから。」王が人間の義務と掟に迫られて抵抗しながらこのような決断をしたのではなく、神の命令に従うという建前があるために彼の内心の不服と矛盾がここに露呈している。心の中では激しく抵抗しながらも神の命令には従順を装い、しかも反抗的な言葉を口にしてはならないという抑制がこの「良きように計らえ eu gar eie」に籠められている。この反抗心の抑制が勝利を得た後に解き放たれて、彼を偏執的なまでに残虐行為に駆り立てただろうということが想像ができる。

cf. (A. Lesky, "Decision and Responsibility in the Tragedy of Aeschylus", *JHS*, 86, 1966, 81)

王のこの内心の不満と憤りが不幸な結果を引き起こす。(Ag. 222-223, 763-771)

- (17) コロスはギリシア軍の出陣と娘イーピゲネイアの犠牲について苦悩するアガメムノーンの描写の間に、人智には量り知れぬ偉大な神ゼウスを讃えて歌う。軽率な行為をしでかす者はその行為のもたらす結果に苦しまねばならない。思慮が足らぬために招いた結果に苦悩することによって人は始めて思慮を得るのである、と「悩みによって学ぶ pathei mathos theinai」(Ag. 177)という思想が高らかに歌い上げられる。

もちろんアイスキュロスのゼウス観と彼が描く現実社会の神観念との間に相当の隔たりはあるが、Kittoはこれを「進化するゼウス像」として説明する。(Kitto, op. cit, p. 69)

- (18) アガメムノーンはついに娘を犠牲に捧げる決断を下して自分がその祭司の役割を演じ、女神の怒りを解いてトロイアに向けて出航する。しかし彼は敬虔な思慮からその決断をしたのではなく、その不満と憤激が彼を破滅に導く。ここに「不信、不浄、不敬の気性」(dyssebes, anagnos, anieros)と形容された王の心は「何でもやって見せよう、何でも来い」(panto-tolmos)の捨て鉢な心構えに変わったのである。これが征服後の残虐行為の契機になるのであるから、「暴勇・傲慢 thrasos」と並んで「不遜・短慮 tolma」は「思慮 sophron」と反対の言葉と定義してよいだろう。「恥ずべき事を思いつかせる惨めな狂気は禍いの根源であり人を不遜に thrasynein するものだから」(Ag. 222-223)と続けて言う通りである。彼はこの不敬虔な心根と行動を裁かれるのである。(Hammond, *P. F. L. J. H. S.*, p. 47)

- (19) ギリシア軍は十年にわたる苦戦の末にトロイアを陥落させ、敵の町を徹底的に破壊



して多年の恨みを晴らした。しかし彼らの報復は苛酷に過ぎて神々に対する不敬を犯し、その罪で将兵は帰途において様々な困難に遭遇し、アガメムノーン自身もその裁きを受ける。神殿や聖所の破壊は同時代のギリシア人の目には比較を絶する非道な行為と映った。クセルクセースの大軍もこのような暴挙のために空しく滅びた(Ag. Pers. 812)。征服した国の民を根絶やしにすることは、神々の立場からも祭儀を行う者を失うことになり不敬行為となる。アガメムノーンたちはこうして人倫を踏み躪り神への冒瀆も犯したのである。(cf. Fraenkel, op. cit. II, p. 266ff.)

- (20) 伝令が伝えるギリシア軍の暴虐ぶりは、クリュタイメーストラーが危惧した以上のものだった(Ag. 338ff)。「(パリス)は誘拐罪と窃盗罪の裁判に負け、掠奪したものを祖国と共に失い、父祖伝来の家屋敷を刈り取られてしまった。プリアモスの一族はその罪を二倍にして償ったのだ」(Ag. 534-537)。

この表現は裁判用語であり、アッティカの法律は二倍の弁済を要求したという。(Fraenkel, II, p. 273) しかしこのような total ruin は justice ではないと Kitto は言う。(Kitto, *F. M. D.*, p. 14-15) とにかく伝令が言う「パリスとまたその責任共同体である都も為したこと to drama が為されたこと to pathos よりも多いなどと豪語はできませんまい」(A. 532-533)と言うことばは、王妃の「奪った者たちがまた奪い返されることのないように」(Ag. 340)という願いとは逆の結果を示している。

アルテミスは古い「野獣の女神 Potnia theron」の系譜を引いている。

- (21) この読み方は Loeb のテキストに従う。「傲慢 Hybris、暴勇 Thrasos、禍い Ate」を正義と同様に大文字で表し「女神」として神格化して解釈するのである。

“Dike” (Ag. 763 ff.) Hammond は Thrasos を Ate の子と解釈する。N. G. L. Hammond, “Personal Freedom and Its Limitations in the Oresteia”, *JHS.* 85, 1965, 48.

本文中の大文字で始まる alphabet は抽象名詞の神格化という解釈を示す。

- (22) 帰国したアガメムノーンは妻の手に掛かって非業の死を遂げたが、王妃の側にはそれには当然過ぎるほどの多年にわたる恨みがあつた。その最たるものは娘イーピゲネイアの犠牲であり、いかに遠征軍の総大将としての義務に迫られたとはいえ、「掟に背く犠牲 anomos thysia (Ag. 150)」は妻の心に激しい憎悪を育み、「夫を恐れぬ ou Deisenor」(Ag. 153)心を潜ませた。この積年の恨みは凶行後の彼女の言葉に良く表れている。「ではこの私の誓いの定めを聞きなさい。私の娘の成就された正義 Dike と禍い Ate とエリーニョス Erinyes にかけて、この方々に対して私はこの男を屠ったのです」

(Ag. 1431-1433)。ここでは復讐霊と禍いの女神に並んで「正義の女神」は神格化された報復の意味で用いられている。

『エウメニデス』は社会的な問題を題材にしているが、その中でも当時の女性の置かれた劣悪な地位に対する反抗を「男性的な資質を待つ」クリュタイメーストラーが代表している。自分の娘の生命を夫が勝手に処置したことに対する怒りが彼女をこのような行動に駆り立てたのであるから、「娘の正義」は重要な動因であった。

(Winnington-Ingram, *Studies in Aeschylus*, p. 127)

- (23) 三度目の灌典は「救い主ゼウス」(Eu. 760)に捧げられるのが普通であるから、この表現は非常に冒流的である。報復者としての一面を持った正義の女神 Dike がエリーニウスと同一視されることもあるが、王妃の敵愾心がかくも強烈なことにコロスは驚いてたしなめるのである。(E. Fraenkel, *op. cit.* III, 653)

- (24) tharsos 名詞(courage, boldness, audacity)、thrasyus 形容詞(courageous, bold, confident over-bold, rash)、tharsein 動詞(to be of good courage, take courage; to be over-bold, audacious) これらは同系の言葉である。

コロスはアイギストスが自分の怯懦を棚に上げて正義 dike の行為と唱えることを咎める。「アイギストスよ、禍いの最中で思い上がった振る舞いをする事 hybrizein は許しませんぞ、あなたはこの方を故意に（自分の意志で）殺した事 hekon kataktaneinと言われるのか、単独でこの嘆かわしい殺人を計画したと。では良く心得ておくがよい、裁判であなたの身は、人々の呪いと石打の刑を免れないでしょう」。

(Ag. 1612-1616)。ここで強調されているのは、アテーナイの法律用語における故意の殺人 phonos ek pronoias であり、この種の重罪は特にアレイオパゴスの法廷で裁かれた。

(Fraenkel, *op. cit.*, III, p. 76)

- (25) 「裁き手、裁判官 dikastes ; 裁きをもたらす者、報復者 dike-phoros (Ch. 120)」ここで述べられているのは、不正に対して正義を報いる者は、みずからを神霊の意志の代行者と見なし、神の助けが得られると信ずる「正義の裁き」の思想である。これは第1部ではアガメムノーン、クリュタイメーストラー、アイギストスが強く主張している考えである。これを第二部では劇の冒頭でオレステースとエーレクトラーの姉弟が繰り返している。この劇が「正義の戦い」の応酬であることを端的に示している。

- (26) 「放縦 tilemon < tlao」は tolma と同義である。「悪辣 panourgon」はどんな悪事でもやってのけると言う意味 (Ch. 384)。「大胆不遜きわまりない」"pan-tolmos",

all-daring (Ch.429-433), 「不遜にも---した etlen <tlao」 "broton tlamoni kai panourgoi" (Ch. 382-385)。

カッサンドラーも幻視状態の中で彼女の行為を非難している。「このような大胆不遜な行為を tolma。女の身で男を殺す者。彼女を忌まわしい獣のどの名で呼べばふさわしいのだろう。--- あの大胆不遜きわまりない女は。"he panto-tolmos" (Ag. 1231-1237)」アガメムノーンも「何でもやってのける panto-tolmos」自暴自棄な気持ちになって自滅したのだった(Ag. 218-221)。

- (27) 「遺体損壊 maschalismos」とは、遺体から手足や耳鼻を切り取り紐に通して頸や胴の周りに縛り付け、それによって殺人者が死者の祟りを封ずることが出来る考える風習である。王妃はその風習に従ったのであろうが、その残虐な陵辱はむしろオレステースの憎しみに油を注ぎ、生みの親に対する最後の憚りを棄てさせる結果になった。ソポクレスの "Elektra" では姉の悲惨な有様にオレステースが憤激するのであるが、アイスキュロスの劇では父親への陵辱がその役目を果たす。

国王の葬礼としてはあまりにも貧相で惨めな埋葬の様子をエレクトラーが語った後を受けて、コロスはさらに付け加える。「手足を切り取られたのです、このことだけは知っておいて下さい。あの方をそんな風に埋葬した時に、その死をあなたの生涯にわたって耐え難いものにしてやろうと謀ってしたことです。お父上の惨めな辱め様はお聞きのとおりです」(Ch. 439-443)。この陵辱を聞いてオレステースの復讐の決意は固められる。cf. (Ch. 994-995)

(Bowra; *Sophoclean Tragedy*, p. 249ff.)

(K. v. Fritz; *Antike und Moderne Tragödie*, 1962, p. 124ff.)

- (28) 姉弟の報復実行を前にコロスは eros について歌う。Eros はか弱い女の心を燃え立たせ罪深い所業をも敢えて為さしめるほどの力を持っている。この箇所には、女性の持つ大胆不遜が「傲慢 hybris の罪(Ag. 763-771)」と対照的に、hyper-tolmos, panto-tolmos, tlemon と並んで数え挙げられているが、これほどの密度で「不遜の罪 tolma」が列挙されていることに注目したい。この事実は第二部において「不遜 tolma」が「正義 dike」の本質を解明する上で重要な用語であることを示すと考ええる。

- (29) 以下を召使いのことばとする Page の解釈に従う。つまり舞台の上では死んだと報告されたオレステースが復讐を遂げたのであるが、観客はこの「死者たち」の中にこれまでその加勢が必死に祈り求められていた父王の霊の存在を感じ取ったことであろう。少なく

ともクリュタイメーストラーは直ちにこの謎めいた言葉の意味を理解しているのである (Ch. 887)。

- (30) この直前まで父親に加えられた暴虐な扱いを嘆き憤り母親への報復に逸っていたオレステースではあったが、生みの母が胸をはだけて命乞いをする姿にたじろがざるを得ない。彼はここで始めて生身の母親の姿を目にするのであるから。しかしこのとき彼の後ろに寄り添いながらこれまで沈黙を守っていたピュラデースがはじめて口を開く。それもアポローンのお告げを実行せよと彼に迫るのである。Kitto はこの箇所は劇の真の主人公が神々であることの証拠であるという。(Kitto, op. cit., p. 53)

cf. 註(36) theos metaitios.

- (31) オレステースは凶行の後になって始めて自分の犯した罪の重さを自覚して戦く。「恐怖が心臓の鼓動に合わせ臍患の調べに乗せて歌い踊ろうと待ち構えている (Ch. 1024-1025)。」手に付いた母親の血が心を悩ますのだとコロスは言う。「それはあなたの両手に付いた血が生々しく、そのために心に錯乱 taragmos が降りかかるのです」。

(Ch. 1055-1056) オレステースは母殺しの罪意識に悩まされ、錯乱し狂気を得てアポローンの助けを求める。

- (32) 母殺しと狂気をもっと明確に関係づける解釈もある。cf. Euripides, 「この哀れなオレステースは寝床に倒れて伏している、母親の血が彼を狂気に駆り立てているのです」。「狂気が、母親の復讐が」(Euripides, *Orestes*, 35-37, 395-400)。

- (33) デルポイのアポローンが肉親の殺害者を浄める機能をはたすのは前七世紀にいたってからである。氏族による財産の共有制は氏族の中の責任の連帯性を強め、そのなかにおける殺人は犯人の生命か等価値の賠償によって償われた。そして氏族間の怨恨は共有の責任として引き継がれ、果てしない抗争が繰り返されることがあった(vendetta)。しかしその際に殺人者が争いの継承を避けるために元の氏族から放逐され放浪し、嘆願者として他の氏族の保護の下に受け入れられることがあった。

だが土地の私有化と貴族性の成立と共に、より大きな社会組織にこの方法を適応させる必要が生じた。そこで氏族中心の考え方をポリス中心に拡大し、その中での殺人をより大きな権威が浄め裁くことになった。それを宗教的にはデルポイの僧職が司り、政治的にはアテーナイの裁判所が引き受けることになったのである。この劇はそのような意識と制度の改革を背景にしている。(G. Thomson, *Aeschylus and Athens*, pp. 34, 72f., 247)

- (34) Eumenides の冒頭で巫女 Puthias prophetis がこのアポローンの神託所の由来を述べる。それによるとこれは最初に大地の女神 Gaia が占有し、次に掟の女神 Themis そして光明の女神（月）Phoibe そして太陽神アポローン Phoibos という順序で受け継がれてきたという。アイスキュロスはここでこの移譲が平和裡に行われ、決して暴力によらないことを力説している(Eu. 5)。

しかし実際はエウリピデースの伝承にあるように Gaia と Themis の神託所を Phoibos が力づくで奪い取ったと見るのが正しいだろう。(Eur. I. T. 1234-1283)この事情を Harrison は次のように言う。テミスは宗教原理そのものであり、問題はガイアからポイボスへの移譲がポイベーを介して行われたことにある。元来この神託所はガイアとポイベーの名が示すように、夜と月の神託、即ち夢占いの場であった。それに対して太陽神アポローンの神託はゼウスから与えられた天の真理を示す。この古い大地の祭儀と後の人格化されたアポローン信仰との争いをアポローンによるピュトーン退治の神話が示すのだが、従来のこの伝承をアイスキュロスが祭祀場の平和な発展と再解釈することにこの劇の意味があるとするのである。(J. E. Harrison, *Themis*, pp. 385-439)

- (35) "theos metaitios" (the god; being in part the cause of a thing, accessory to) [particeps, adiutor; Italie]. これは「責任、咎、非難」aitia を共に分かち合う神、共犯者と解釈できるが、実際の文脈ではオレステースの行為を是認し教唆して実行を迫るアポローンの姿勢を良く示す言葉である。そしてその背後にはゼウス大神が控えており、すべてはその神の意志に基づくのであるから、これは場合によっては「神助、天佑を与える神」として理解する方が良い。オレステースは全てこの神の意志と命令に従って非主体的に行動する存在としての面を持っているから、その意味では神に操られる犠牲者である。

またこの神の意志は総体的には当時の社会を支配する倫理規定の圧力を代表するものとも理解できる。オレステースは氏族社会から都市国家へと変容する時代の転換期にあって、服属すべき倫理の主体の変化についていけない人間の苦悩を代表すると解釈できる。

- (36) オレステースは報復の直後に自分がその行為によって「穢れ miasma」を得て水にも近づくことは出来ないと言う(Eu. 655-656)。これは共同体の最高の倫理規定を犯した罪人が、その祭儀から閉め出されることを意味する。さらにエウリピデースの『オレステース』では母殺しの罪人である姉弟は、アルゴスの人々から屋内に迎え入れること、炉端に座ること、人と口を利くことを禁じられ、投石の刑か斬首の刑に処せられる寸前にまで至る。(Eur.

Or. 46-52) しかしこのような共同体からの追放は反面では「報復行為の応酬」を避けるための知恵でもあったのである。「妻が夫を殺し、その子供が母を殺し、そのまた子供が殺人に殺人で仕返しをするとしたら、どこまで行けば禍が尽きるだろうか。われらの祖先はこのように定めた --- 血に穢れた者には殺人で仕返しをせずに追放刑によって潔めよと」(Eur. Or. 508-515)。

オ레스テースの念頭にはこの放浪の苦難の中で、共同体に対する彼の罪は忘れ去られ浄められたという認識があった。

- (37) エリニュスのいう「今や新しい制度の転覆だ」(Eu. 490-1)にはさまざまな解釈がある。この言葉だけを切り離しては意味が決定できないが、それが持つ意味は、前 458 年春に劇場に詰め掛けた観客には明白であった。これはアテーナー女神のいう「私はこの掟を未来永劫定めるつもりだ」と共に理解すべきであると Chonacher は言う。(Conacher, *Aeschylus' Oresteia*, p. 230ff.)

Livingstone はこの「恐れ」とは人間社会の防壁である峻厳で不偏な刑法を指すという。エリーニュスの挙げる正義とそれに関連する徳目を検討してみる。恐れ to deinon は心を見張り、節度 sophronein を守らせる。これが無いと誰も、ポリスも人間も正義 dike を守らない。(Eu. 517-525)ここに言う恐れとはもちろんエリーニュスが与える刑罰としての dike である。Livingstone はこれを人間社会の防壁である峻厳不偏な刑罰を指すという。(R. W. Livingstone, "The problem of the *Eumenides* in Aeschylus", p. 123)

- (38) 「放縦な生活 anarchetos bios も服従の生活 despotooumenos bios も推奨してはならない、あらゆる中庸 to mesos に神は力をお授けになった」(Eu. 526-530)。この表現は「放縦、無秩序、無政府状態の生活」と「服従、強制、専制の下での生活」のように幅広い意味に取れるので、エリニュスは人間の基本的な生き方の姿勢を述べているのだろう。しかしこれが後のアテーナーの表現になると明らかに「無政府状態と専制政治」を「民主政治体制」と比較している(Eu. 696-700)。これは人間の生活態度が政治体制にも反映されるという詩人の考えを表しているものと理解できる。

「正義 dike の祭壇を守るべし、神を侮る足で正義を足蹴にするなら必ず罰が下る。両親を敬い、客人を大切にすべきである」(Eu. 538-549)。自ら進んで正しい者には幸福が与えられ滅ぶことはない。しかし思い上がって anti-tolmos 限度を踏み越える者、不正に富を蓄える者には滅びが待ち構えている」(Eu. 550-557)。これらのコロスの歌によって、神々また他人に対する敬虔な態度 sebas が重視され、上に述べた徳目はそのような

態度に基づいている。

- (39) アポローンはオレステースの行為に関して「責任を分かち神」であり、その背後にゼウスが控えていることを明らかにする(Eu. 618)。しかしアポローンの弁論態度にはエピアルテースの民主改革に対する保守側の反感を代表する詩人の意図が潜んでいることも敏感な聴衆には理解されたであろう。アレイオパゴスを代表するエリーニュスたちの純朴なまでのひたむきな追及の姿勢に比べると、民主的な司法改正を代表するアポローンの一見無責任な弁論姿勢には真剣な姿勢が見られない。Bauman はアポローンにはいかさま弁論士(shyster)の姿すら感じられると言う。神の次のことばにもそれが強く現れている。

「そしてかの地では、この裁判の陪審員たちを私は甘言を弄して丸め込み、  
なんとか逃れる方便を探してみせよう。

お前をこの苦勞からすっかり解放してやるために、

そもそも母親の生命を奪うように説き伏せたのはこの私なのだから」(Eu. 81-85)。

(R. A. Bauman, *Political Trials in Ancient Greece*, pp. 32-35)

- (40) アテーナー女神は裁判に先立ってアレイオパゴスの法廷の由来を語る。一つの伝承ではこの丘をアマゾーンの軍隊が攻めた時にアクロポリスに対峙するこの丘に陣を張り、彼らの祖先と称するアレースに犠牲を捧げその社を築いた(Eu. 681-695)。別の伝承によるとポセイドーンの子ハリロティオスはアレースの娘アルキッペーに対して非道な行為を働いたためにアレースによって殺害された。アレースは親族殺人の罪に問われてこの丘で神々の裁きを受け、それ以後この丘はアレースの丘と呼ばれるようになったという(Eur. El. 1258-63)。

このような伝承からこの法廷は「流された血の裁きをする最初の法廷」(Eur. 682)となり、その裁きは「それ以後そこで行われる評決がこの上無く神聖であり、また信用出来るものとして、神々から嘉されている」(Eur. El. 1260-1263)。

しかしこのアレイオパゴスの由来を歴史的に見ると、上の伝説はその歴史の神話化されたものであることが分かる。アルコーンを中心とする寡頭政治の場としてのアレイオパゴスの会議は、国政の最も大きな重要な部分を掌握し、秩序を紊すものに懲罰を加え罰金を科す権限を持っていた。ソローンの民主的な改革以後もこの会議は以前の権限を保持し続け、国内の党争を防いでいたのである。しかしクレイステネスの改革(前 507-508)によって民衆の力が増大し、ペルシア戦争以後彼らの権利要求の声が強まってきた時にこの会議の性格は民主政治の実状にあわず、ついに民衆派の領袖エ

ピアルテースはこの会議から父祖伝来の権能を剥ぎ取り、それを五百人会議、民会、裁判所に分かち与えた(前 462)。そのためこの会議は殺人、故意の傷害、放火などの重罪とオリブの聖樹の取り締まりのみを扱うようになった。エピアルテースは後に刺客によって暗殺され、この会議は三十人支配の際にも見られるように、常に反動派の復権の目標となった。(アリストテレス:『アテーナイ人の国政』、3. 6. 8. 4, 25. 2, 35. 2) cf. (512-529)

(41) 462 年のエピアルテースの改革後、アレイオスパゴスの会議は主に殺人罪を扱うようになる。ここで言う民主政治とは党派間の争いを言論で解決する中庸の政治を意味する。

(42) 「エウメニデス」におけるアテーナー女神とエリーニュスの言葉はアテーナイが置かれた当時の政治的状況を抜きにしては理解できない。「戦争なら外でやりなさい」(Eu. 864-5)もこの状況を考慮するなら理解できる。(K. J. Dover, op. cit. p. 235)

(43) アテーナーの票を加えて同数になるという Kitto の説を採る。(H. D. F. Kitto, op. cit., 66-65) cf. (Eu. 741-743, 794-796).

アテーナー女神の勧告の後でアテーナイ市の最良の市民から成る裁判官が裁きの投票をする。そしてこの投票の結果が同数のためにオレステースは無罪とされる。(cf. アリストテレス、A. P. 69. 1) ここで裁判官の数とアテーナーの票との関係が問題になるが、Kitto の解答がもっとも妥当ではないだろうか。即ち彼は Eum. 711-733 の十の couplet と一つの triplet を十一人の裁判官に割り当て、十二番目の票を投じながら女神が自分の投票の意味を説明すると理解する。これは演出上からも、後の言葉の意味からも鋭い着眼であると思う。(Kitto, op. cit., p. 65)

Livingstone はこの票が同数に分かれたのは女神を除いた裁判官の間でのことと考えているが、彼はこれをどちらの党派も完全な勝利を収めるのではなく、人間の間では評決できない問題の調停を女神に委託するのであり、女神は人間の理性を越えた理由によって裁決をするのだと解釈する。(Livingstone, op. cit. p. 127)

だがこの観点からしても女神の投票の後に票を数えるのだから、わざわざオレステース側の票を一票多くする必要はない。むしろ全投票数が同数になってオレステースが無罪になる方が、双方とも決定的な勝利を得たのではないと言う表現に適している。そしてアテーナーが裁判官の一人として加わる事の方がこの法廷の神聖さを確立する上で重要である。Kitto はこの意味を「責任を分かち神 theos metaitios」の表現のひとつと見ている。(Kitto, op. cit., p. 66)

このアテーナーの裁決によってオレステースは無罪とされたが、それは今まで双方の主



張に関連して述べられたように、因習的な血の報復の掟によってポリスの秩序が乱されるのを防ぎ、殺人事件のような犯罪が個人の間で暴力的に解決されるのではなく、神聖な権威を授けられた公の法廷で裁かれるべきことを意味している。このためにどちらの側も勝利者とされずに、また敗者ともされない解決方法が提示されている。

R. Kuhns はこの意味をポリスと家との争いにおいて家が敗北し、様々な家を代表する民から成るポリスの法廷の権威が確立されたと言う。この劇の上演はパルテノンの建設工事が着工される年(前 447 年)に 10 年ほど先立っていた。これはアテーナイの覇権と新しい神々の勝利を記念するものと言えよう。

(Kuhns, *The House, the City and the Judge*, p. 66)

しかしこれほど激しく対立した両者が最後には双方共に名誉を損なうことなく和解する方法が提示されたのである。これは Kitto のいうようにポリスを大きい家とみなし、成熟したポリスにおいてはこのような形で正義 Dike の主張に伴う問題を解決することが、社会の発展に大きく寄与するのだという説明が優れている。(Kitto, *op. cit.* pp. 56, 82)

- (44) この母子の血縁関係を否定する論理はこの劇の思想内容だけでは理解が困難であるが、当時のアテーナイを取り巻く政治状況からひとつの説明ができる。メガラの僭主テアグネスの娘と結婚していたアテーナイの政治家キュローンは、メガラ人の援助の下に僭主の地位を篡奪しようと企ててオリュンピアの大祭の折りにアクロポリスを占拠した。しかし外国人が加わったことで民衆の支持を得られずに失敗し、アテナ・ポリアスの神殿に逃げ込み神の庇護を求めた。しかしアルクマイオン家の一人であり当時のアルコーンであったメガクレスは、助命を与えるという口実で彼らをおびき出しその仲間を殺した。そしてキュローンが国外追放になった後に、アルクマイオン一族も神への誓言を破った罪で穢れたものとして追放処分になった。(B. C. 632)

アルクマイオン家の一族アガリストを母に持つペリクレスは、彼を失脚させようとする保守派を支援するスパルタから、この家系を理由にして追放を要求された。そしてこの議論の際に「母親の血筋は問題にならない」という解釈が宗教的な裁可の上で用いられたと考えられる。(C. Smertenko, *J. H. S.*, p. 234)

しかしアルクマイオンの一族はすでにデルポイで潔めを受けていた形跡があり、ペリクレスの血筋が問題になったことを否定する見解もある。いずれにせよもしこのアポローンとアテーナーが用いる論法の背景にこのような政治的な駆け引きあるなら、

この劇の観客は「血の穢れとその浄め」の問題に敏感に反応したことであろう。

- (45) この劇の上演に先立つ年(前 462 年)にアテナイではエピアルテースの改革が行われ、保守派の権力を縮小し、アレイオスパゴスの法廷の特権を奪った。そして同年にアテナイはペロポネーソス陣営との条約を破棄してアルゴスと同盟を結び、翌年にはメガラと同盟した。この記憶に新しいアルゴスとの同盟については各所で言及されている(Eu. 289-291, 670-673)。ここにもこの劇のもう一つの政治的背景が見出される。

伝承ではオレステースはミュケーナイまたはスパルタの出身であるが、これを劇ではアルゴスの王子という設定にしてある。これには当時保守派の政治家キモンが勢力を失い、スパルタからアルゴスに同盟を切り替えたという政治的背景があった。

この劇が上演された年(前 457 年)は内外に大変な政争と戦争の危険が迫っている時期であった。アイギナが攻略され(前 456 年)、ペイライエウス港を結ぶ長壁が急造され(前 457 年)、エジプトに遠征軍を送り(前 454 年)、民衆派の領袖エピアルテースは暗殺された(前 461 年)。アテナイはペロポネーソス同盟と戦っている最中であり、スパルタ陣営からの保守派援助と内政干渉の策動は露骨であった。この危急の際には国内の抗争と派閥の争いを中止して一致して外敵に当たらねばならない情勢にあった。劇の主題からそれた話題に突如切り替えられた印象を受けるのは、読者が時代と場所を隔てているからであり、当時の観客には分かり過ぎるくらい明瞭な内容であった。

アテナー女神が登場して最初に述べる挨拶の中で触れる「トロイア周辺地域の領有権」(Eu. 397-402)の背景にもこの地域をめぐるミュティレーネーとの争いがあり、この言及も観客にはすぐ理解できることであった。(Conacher, *op. cit.* 197ff.)

むしろこの長大な作品を通じてこのメッセージを観客に訴えかけることこそがこの劇の真の目的であったと考える。(K. J. Dover, *op. cit.* p. 235)

- (46) これらは積極的な意味では「勇気、大胆」の美德を表す言葉であったが、否定的に用いられると「暴勇、軽挙、傲慢、不遜」と言う悪徳を示すようになる。この悲劇ではアガ멤noon、クリュタイメーストラ、オレステースの性格と行動の特質を表すキーワードとして用いられている。さらにこれが市民の間の政治感覚や愛国的感情と結びつくときには、民主制度を揺るがす党派的分裂傾向、拡張的冒険主義となって内部抗争と対外戦争の危険をもたらす。

thrasos (courage, confidence), tolma (courage, boldness), cf. tharsos (courage, boldness)

(47) 市民は国内における争いを暴力によって解決しようとはせずに、言論の力に頼り説得に訴えて意志を伝えなければならない。その信念に立って詩人は言論の精神を「説得の女神 Peitho」の地位にまで高めて権威を持たせアテーナー女神に並ぶ神格として崇め、その保障の下に「復讐の女神 Erinyus」を「恵みの女神 Eumenides」に変身させるのである。「広場のゼウス Zeus agoraios」もこの言論の神聖を保障する。

(48) アテーナー女神は言う「私に聴き従いなさい、あまり辛く受け取らぬように、あなた方は負けたのではありません、裁判の結果は同数の票になって、あなた方の不名誉にはならなかったのです。だがゼウス様から輝きわたる証言が提出され、神ご自身が託宣に答えられご自身で証人に立たれました。」(Eu. 794-798)

すなわちエリーニウスが司る古い氏族社会の倫理を停止して、新しい都市国家に適合する倫理に改変させたのは至高の大神ゼウス自身であった。家を単位にして構成される都市国家の基盤を固めるためには、父系を重視する倫理規定による国家体制を作り上げねばならない。アテーナー女神はこの倫理に基づく都市国家の守護神なのである。

「これはあなた方の恥辱ではありません、あまりにも激怒して女神の身で人間の居る土地を住み難くしないように。私もまたゼウス様に従う身です。それ以上何を言う必要があるでしょうか？ 神々の中で私ただ一人が雷霆を封印して置く場所の鍵を預かっているのです。しかしこれもも用済みになりました」(Eu. 823-829)。

オレステースの苦難によってこの倫理規準が改められ、ゼウスの認める新たな国家体制が固められるならば、もはや「ゼウスの雷霆」が象徴する厳罰の恐怖による支配は必要なくなる。市民たちは説得を武器にして政治を行えばよいのである。その意味でオレステースはゼウスの使う将棋の駒であり、古いゼウスの倫理規定に操られて罪を犯し、新しいゼウスの支配倫理によって放免される。

(49) アテーナーは説得の力を信じて説き続ける。「あなたにとって良いことを語るのに私は決して倦みません、新しい神であるこの私と都に住まう人間たちによって、古い神がその土地を追い出され名誉を奪われて彷徨うなどと言われぬように。しかしもし説得の女神 Peitho を崇めることがあなたにとって尊いことならば、また宥めて説きつける私の舌の力を崇める気持ちがあなたにあるならば、どうか留まって居てほしいのです」(Eu. 880-887)。

そしてこの熱い説得を受け入れたエリーニウスたちにアテーナー女神は感謝の言葉を述べる。「これらの恵みを私の国に対して快く授けて下さることを満足に思います。

そして私が彼女たちのあの激しい拒絶に遭っていたときに、説得の女神 Peitho の優しい眼差しが私の舌と口元に注がれていたことに感謝します。でもやっと広場のゼウス Zeus agoraios が勝利を得たのです。善きことを巡る争いに私たちの側が永久に勝ったのです」(Eu. 968-975)。

そして「恵みの女神 Eumenides」と名を変えてアテーナイの守護神となった女神たちは自分たちを受け入れた都に祝福を与える。ここに平和の本質に関する詩人の思想が表れている。「また飽く事なき抗争 stasis がこの都の中で雄叫びを挙げる事が無いように、また塵泥が市民たちの黒い血を呑み込んで、怒りに燃えて相手を殺して返す都の禍いを遂行することがないように祈ります。たがいに愛し合う心で喜びを相手に返し、心を合わせて敵を憎む様に、それが人間の多くの禍の癒しになるのだから。」(Eu. 976-987)

「暴勇、激情の暴発 thrasos による抗争と内乱 stasis」こそが都市国家の禍いの根深い原因であり、もっとも警戒すべき危険であった。しかし現実の政治状況は緊張する国際情勢を反映して詩人の願いとは逆の方向に突進していった。

(50) トウキュディデース『戦史』久保正彰訳、岩波文庫、cf. Th. 6. 59.

(51) アISKYLOSが晩年にアテーナイを去ってシシリアに赴いた背景にも、これらの劇の解釈をめぐる批判と圧力があつたのではないかと思わせる。一説によると彼はエレウシスの密儀の内容を舞台で漏洩した罪で死刑の告発を受けたとされるが、これは劇作家が受ける告発としては過重である。保守派と改革派がしのぎを削る政争を繰り返し、それが国外の勢力と結びついて戦争の危機にまで至ろうとしている状況だからこそ、これらの簡潔な言及すら大きな政治問題になり告発の原因となる。観客には登場人物が発する僅かなほのめかしも露骨な政治批判として受け取られたことだろう。ソクラテスがペロポネーソス戦争後の混乱の中で「新奇な神を導入し、青年を墮落させた」罪で死刑になった状況を見ればこれも理解できる。